

跡見学園女子大学における サクラの同定調査

An investigation of flowering cherries cultivated
in the gardens of Atomi University.

山 崎 博 子
大 原 隆 明
堂 囿 いくみ

要 旨

跡見学園女子大学構内に植栽されているサクラの分布および同定調査を行った結果、2003年10月現在、全域にわたり合計166個体のサクラが植栽されていることが明らかになった。そのうち、145個体30種類を同定することができたが、その主なものはサトザクラ類（70個体、全個体数に占める割合は42.2%）、野生型のヤマザクラ（32個体、同19.3%）、ソメイヨシノ（15個体、同9.0%）、野生型のエドヒガン（8個体、同4.8%）であった。最も一般的に植栽されるソメイヨシノの個体数が比較的少なく、野生型のヤマザクラやエドヒガンが高頻度で見られるのは本調査地の特徴のひとつであると考えられる。サトザクラ類は計18品種を同定することができたが、このうち個体数が多かったものは‘イチヨウ’（24個体）および‘カンザン’（17個体）の2品種のみであった。ヤマザクラやサトザクラの園芸品種中には‘コウダイジ’や‘ベニナンデン’といった栽培されることが稀なものが含まれていることも特徴的であった。なお、今回同定できなかったものは21個体あったが、その内訳はサトザクラの一品種と思われるもの（2種類2個体）と品種名がない交雑品（19個体）であった。

大原隆明（富山県中央植物園）、堂囿いくみ（東京都立大学理学部牧野標本館）

緒 論

サクラは跡見学園を代表する樹木であり、跡見学園女子大学の構内には全域にわたって多くの種類のサクラが植栽されている。特に樹齢40年のヤマザクラとされている約50メートルにおよぶ並木道は一大美観を呈している。また、これらのサクラは景観上のみならず、教育や生物学的研究に役立っている（山崎ほか1993）。

最近、跡見学園女子大学の在校生や卒業生の中で、構内のサクラを一層大切にしたいという思いが強くなってきた。その例としては、野草料理研究部の学生がクラブ活動で作成した入学式当日の配布用パンフレット「跡見の桜（2001）」や卒業生の岡村比都美氏による広報活動（岡村2002）が挙げられる。また、2003年には4年生が中心となり課外活動の一環として「桜研究愛好会」が結成されたり、3年生が樹木医の池本三郎氏の指導による2号館裏のイトザクラの樹幹治療に加わるなど、跡見学園女子大学内でのサクラへの関心の高まりには特筆すべきものがある。

跡見学園女子大学におけるサクラの導入については、開学当初の1965年（昭和40年）に高山雄三郎氏が京都の佐野藤右衛門氏の桜苗園から247個体を導入し寄贈されたことに始まるのが、初代学監、元学長の伊藤嘉夫氏が1966年5月にまとめた「高山千鶴子嬢記念桜樹（高山雄三郎氏寄贈）」と題された内部資料冊子（以降1966年資料とする）に記されている。この資料には導入された種類、株数および解説も書かれている。また、高山氏の寄贈の経緯や導入された種類については伊藤（1981）にも詳細に記述されている。その後、1980年に第13回卒業生からソメイヨシノ3本が寄贈されグリーンホール前庭に植栽されたほか、1991年には財団法人日本花の会からソメイヨシノ10本とサトザクラ‘イチヨウ’31本が導入されたことや、2001年にオオヤマザクラ（ベニヤマザクラ）6本がスクールバス停留場とグラウンドとの間に植栽されたことが大学営繕課（現環境整備課）の内部資料に記録されている。この他、樹木医の池本三郎氏が構内既存のギョウイコウやウコンの穂木をマザクラの台木に接ぎ木増殖した個体や、校庭の実生から育成された個体なども追加植栽されている。

跡見学園女子大学構内に植栽されているサクラに関する調査資料としては「桜樹」（昭和63年3月11日）と題された1988年の内部資料があり、その時点で構内には合計151個体があり、その一部について同定調査が行われたことが記されている。また、1995年2月および2001年4月にも営繕課によって調査資料が作成されており、前者には1995年時点で177個体が植栽されていることが記され、後者には整理番号や種類名が付された構内のサクラの植栽位置図が掲載されている。

しかし、構内には同定が行われていないサクラがあり、植栽されているすべての個体の調査が早急に望まれていた。植栽されているサクラの現状を調査し、その種類を明らかにすることは研究教育上極めて重要であるのに加え、今後のサクラの栽培管理のために役立つ資料にもなると考えられる。そこで本研究は構内のすべてのサクラを対象として同定調査を行ったうえで、植栽位

置略図を作成することを目的とした。

材料および方法

跡見学園女子大学構内全域に植栽されている、いわゆるサクラ（サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* に含まれる植物）全株を対象に、1993年から2003年の計10年間にわたり調査を行った。同定は花および葉の主に生品に基づいて行ったが、一部についてはさく葉標本および70%エタノール液浸標本を使用した。基本的に全個体について花期および葉期に証拠用のさく葉標本を作成したが、他に似た品種がなく同一クローンと推定されるもの（サトザクラおよびヤマザクラの園芸品種の一部、ソメイヨシノ）についてはそのうちの1個体のみについて標本作製した。これらの標本は跡見学園女子大学内の花蹊記念資料館に収蔵した。同定にあたっては、Miyoshi (1906), 大井・太田 (1973), サクラの品種に関する調査研究報告書編集委員会 (1982), 川崎ほか (1993) などを参照したが、サトザクラおよびヤマザクラの園芸品種のうち類似品種が多いため同定が困難なものについては、森林総合研究所多摩森林科学園、国立遺伝学研究所および東京大学大学院理学系研究科附属植物園に植栽されている個体から花枝をサンプルとして採取し、同定用の試料とした。これらのサンプルの一部については標本作製し、富山県中央植物園標本庫 (TYM) に収蔵した。

結果および考察

1. 総合結果

今回の調査により、2003年10月現在、跡見学園女子大学構内には全域にわたり合計166株のサクラが植栽されていることが明らかになった (図1)。これらの同定結果については表1および表2に示した。なお、これらの個体番号は、図1中の個体番号と一致している。全166個体中、145個体30種類を同定することができたが、これらの内訳は、個体数の多いものから順にサトザクラ類 *Prunus lannesiana* (Carr.) Wilson cvs. (70個体、全個体数に占める割合は42.2%)、野生型のヤマザクラ *P. jamasakura* Sieb. ex Koidz. (32個体、同19.3%)、ソメイヨシノ *P. yedoensis* Matsum. 'Yedoensis' (15個体、同9.0%)、野生型のエドヒガン *P. pendula* Maxim. f. *ascendens* (Makino) Ohwi (8個体、同4.8%)、オオヤマザクラ *P. sargentii* Rehder (6個体、同3.6%)、オオシマザクラ *P. speciosa* (Koidz.) Nakai (5個体、同3.0%)、ヤマザクラの園芸品種 *P. jamasakura* Sieb. ex Koidz. cvs. (4個体、同2.4%)、エドヒガンの園芸品種 *P. pendula* Maxim. cvs. (3個体、同1.8%)、コヒガンの園芸品種 *P. subhirtella* Miq. cv (1個体、同0.6%)、ヤブザクラ *P. hisauchiana* Hisauti ex Koidz. (1個体、同0.6%) であった。最も普遍的に植栽されるソメイヨシノが比較的少なく、野生型のヤマザクラやエドヒガンが高頻度で見られるのは本調査地の特徴のひとつであると考えられる。サト

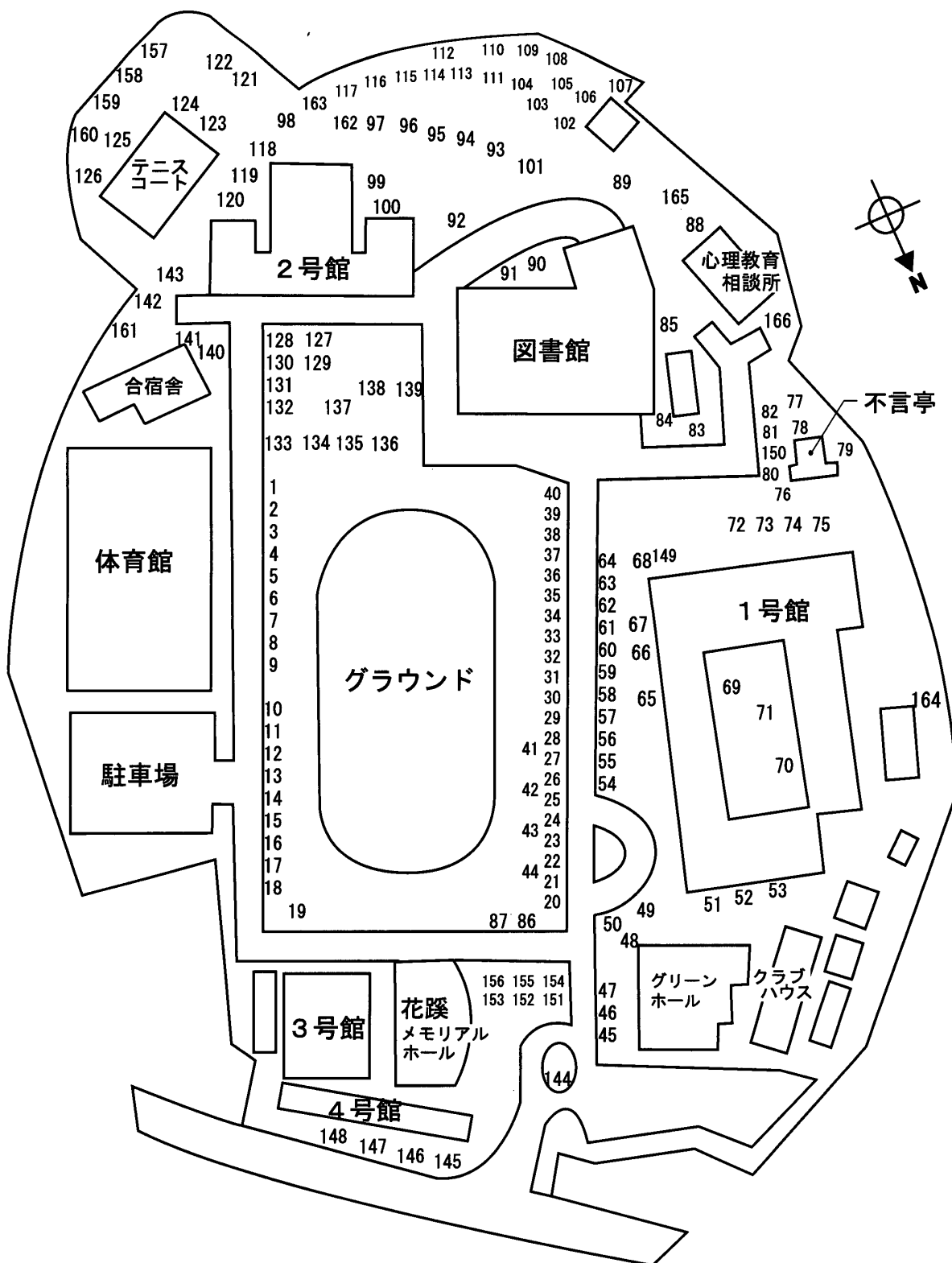


図1. 跡見学園女子大学構内に植栽されているサクラの位置図.

跡見学園女子大学におけるサクラの同定調査

表 1. 跡見学園女子大学構内のサクラの同定結果 (個体番号順)

個体番号	和名	個体番号	和名	個体番号	和名
1	ヤマザクラ	61	交雑個体	121	サトザクラ 'イチヨウ'
2	ヤマザクラ	62	ヤマザクラ	122	サトザクラ 'イチヨウ'
3	ヤマザクラ	63	ヤマザクラ	123	サトザクラ 'イチヨウ'
4	ヤマザクラ	64	ヤマザクラ	124	エドヒガン
5	ヤマザクラ	65	ヤマザクラ 'ヒヨシザクラ'	125	サトザクラ 'イチヨウ'
6	サトザクラ 'タオヤメ'	66	サトザクラ 'エド'	126	サトザクラ 'イチヨウ'
7	ヤマザクラ 'ヒヨシザクラ'	67	サトザクラ 'シラユキ'	127	サトザクラ 'コマツナギ'
8	エドヒガン	68	サトザクラ 'ウコン'	128	サトザクラ 'バイゴジジュスカケザクラ'
9	交雑個体	69	交雑個体	129	エドヒガン
10	エドヒガン	70	交雑個体	130	サトザクラ 'アラシヤマ'
11	ヤマザクラ	71	交雑個体	131	サトザクラ 'イチヨウ'
12	エドヒガン	72	ソメイヨシノ	132	ヤマザクラ 'サノザクラ'
13	サトザクラ 'タオヤメ'	73	ソメイヨシノ	133	サトザクラ 'イチヨウ'
14	ヤマザクラ	74	ソメイヨシノ	134	サトザクラ 'イチヨウ'
15	ヤマザクラ	75	サトザクラ 'イチヨウ'	135	交雑個体
16	エドヒガン	76	交雑個体	136	サトザクラ 'イチヨウ'
17	ソメイヨシノ	77	サトザクラ 'フゲンソウ'	137	エドヒガン 'ヤエベニシダレ'
18	エドヒガン	78	ソメイヨシノ	138	コヒガン 'ジュウガツザクラ'
19	サトザクラ 'カンザン'	79	ヤマザクラ	139	ヤブザクラ
20	ヤマザクラ	80	サトザクラ 'イチヨウ'	140	サトザクラ 'ショウゲツ'
21	ヤマザクラ	81	サトザクラ 'イチヨウ'	141	交雑個体
22	ヤマザクラ	82	サトザクラ 'カンザン'	142	交雑個体
23	交雑個体	83	サトザクラ 'アラシヤマ'	143	ヤマザクラ
24	サトザクラ 'カンザン'	84	サトザクラ 'イチヨウ'	144	ソメイヨシノ
25	ヤマザクラ	85	交雑個体	145	サトザクラ 'エド'
26	交雑個体	86	サトザクラ 'コウダイジ'	146	ソメイヨシノ
27	ヤマザクラ	87	サトザクラ 'コウダイジ'	147	ソメイヨシノ
28	ヤマザクラ	88	サトザクラ 'コウダイジ'	148	ソメイヨシノ
29	サトザクラ 'クシマザクラ'	89	サトザクラ 'イチヨウ'	149	オオシマザクラ
30	交雑個体	90	サトザクラ 'イチヨウ'	150	オオシマザクラ
31	サトザクラ 'エド'	91	サトザクラ 'イチヨウ'	151	オオヤマザクラ
32	サトザクラ 'スザク'	92	サトザクラ 'イチヨウ'	152	オオヤマザクラ
33	ヤマザクラ	93	サトザクラ 'イチヨウ'	153	オオヤマザクラ
34	ヤマザクラ	94	サトザクラ 'イチヨウ'	154	オオヤマザクラ
35	ヤマザクラ	95	サトザクラ 'イチヨウ'	155	オオヤマザクラ
36	サトザクラ 'アラシヤマ'	96	サトザクラ 'イチヨウ'	156	オオヤマザクラ
37	交雑個体	97	サトザクラ 'イチヨウ'	157	オオシマザクラ
38	サトザクラ 'シバヤマ'	98	サトザクラ 'イチヨウ'	158	交雑個体
39	サトザクラの一品種 (a)	99	サトザクラ 'カンザン'	159	交雑個体
40	ヤマザクラ	100	サトザクラ 'センダイシダレ'	160	交雑個体
41	ソメイヨシノ	101	エドヒガン	161	サトザクラの一品種 (b)
42	ソメイヨシノ	102	サトザクラ 'カンザン'	162	サトザクラ 'マザクラ'
43	ソメイヨシノ	103	サトザクラ 'カンザン'	163	サトザクラ 'マザクラ'
44	サトザクラ 'ギョイコウ'	104	サトザクラ 'カンザン'	164	サトザクラ 'アラシヤマ'
45	ソメイヨシノ	105	サトザクラ 'カンザン'	165	サトザクラ 'ギョイコウ'
46	ソメイヨシノ	106	サトザクラ 'エド'	166	サトザクラ 'ウコン'
47	ソメイヨシノ	107	オオシマザクラ		
48	ヤマザクラ	108	サトザクラ 'カンザン'		
49	エドヒガン 'イトザクラ'	109	サトザクラ 'カンザン'		
50	ヤマザクラ	110	サトザクラ 'カンザン'		
51	交雑個体	111	サトザクラ 'カンザン'		
52	オオシマザクラ	112	サトザクラ 'カンザン'		
53	交雑個体	113	サトザクラ 'カンザン'		
54	ヤマザクラ	114	サトザクラ 'カンザン'		
55	ヤマザクラ	115	サトザクラ 'カンザン'		
56	ヤマザクラ	116	サトザクラ 'カンザン'		
57	ヤマザクラ	117	サトザクラ 'エド'		
58	ヤマザクラ	118	エドヒガン 'イトザクラ'		
59	ヤマザクラ	119	ヤマザクラ 'ベニナンデン'		
60	ヤマザクラ	120	サトザクラ 'イチヨウ'		

表 2. 跡見学園女子大学構内のサクラの同定結果 (種類別)

和名	学名	個体番号	個体数
ヤブザクラ	<i>Prunus hisauchiana</i> Hisauti ex Koidz.	139	1
ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz.	1~5, 11, 14, 15, 20~22, 25, 27, 28, 33~35, 40, 48, 50, 54~60, 62~64, 79, 143	32
ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz. 'Beninanden'	119	1
ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz. 'Hiyoshizakura'	7, 65	2
ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz. 'Sanozakura'	132	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Arasiyama'	36, 83, 130, 164	4
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Albo-rosea'	77	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Gioiko'	44, 165	2
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Grandiflora'	68, 166	2
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Hisakura'	75, 80, 81, 84, 89~98, 120~123, 125, 126, 131, 133, 134, 136	24
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Juzukakezakura'	128	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Kodaiji'	86~88	3
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Komatsunagi'	127	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Kusimana'	29	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Multiplex'	162, 163	2
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Nobilis'	31, 66, 106, 117, 145	5
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Sekiyama'	19, 24, 82, 99, 102~105, 108~116	17
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Sendai-shidare'	100	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Shibayama'	38	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Shujaku'	32	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Sirayuki'	67	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Superba'	140	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson 'Taoyame'	6, 13	2
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson cv.	39	1
サトザクラ	<i>Prunus lannesiana</i> (Carr.) Wilson cv.	161	1
エドヒガン	<i>Prunus pendula</i> Maxim. f. <i>ascendens</i> (Makino) Ohwi	8, 10, 12, 16, 18, 101, 124, 129	8
エドヒガン	<i>Prunus pendula</i> Maxim. 'Pendula'	49, 118	2
エドヒガン	<i>Prunus pendula</i> Maxim. 'Plena-rosea'	137	1
オオヤマザクラ	<i>Prunus sargentii</i> Rehder	151~156	6
オオシマザクラ	<i>Prunus speciosa</i> (Koidz.) Nakai	52, 107, 149, 150, 157	5
コヒガン	<i>Prunus subhirtella</i> Miq. 'Autumnalis'	138	1
ソメイヨシノ	<i>Prunus yedoensis</i> Matsum. 'Yedoensis'	17, 41~43, 45~47, 72~74, 78, 144, 146~148	15
交雑個体		9, 23, 26, 30, 37, 51, 53, 61, 69~71, 76, 85, 135, 141, 142, 158~160	19

ザクラ類は18品種を同定することができたが、このうち個体数が多かったものは‘イチヨウ’ ‘Hisakura’ (24個体) および ‘カンザン’ ‘Sekiyama’ (17個体) の2品種のみであった。‘イチヨウ’ は1991年に財団法人日本花の会から新規に導入された記録が残っており、今回確認されたものは全てそれに由来すると考えられる。‘イチヨウ’ 以外のサトザクラの大半は開学直後に京都の佐野園から導入されたものと思われるが、導入時に作成されたリスト(1966年資料)には名前が挙がっていないものも多い。しかし、このリストには個別に品種名を挙げられたもの以外に、「里桜」として一括されて挙げられた一群があり、上述の品種はこの中に含まれていた可能性が高い。なお、園芸品種の中にはヤマザクラ ‘ベニナンデン’ *P. jamasakura* Sieb. ex Koidz. ‘Beninanden’ やサトザクラ ‘コウダイジ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Kodaiji’ といった一般的に栽培されていないものが含まれていることも特徴的であった。

2. 特筆すべき種類

今回の調査で跡見学園女子大学構内に植栽されていることが明らかになったもののうち、特筆すべきと思われる種類について以下に記述する。

ヤマザクラ (野生型) *P. jamasakura* Sieb. ex Koidz.

跡見学園女子大学構内では最も個体数が多い種類。葉は裏面が顕著に白色を帯び、縁の鋸歯はごく低くほとんどが単鋸歯で先端はやや内側へ曲がり鋭尖形であるがほとんど芒状にはならない、花の萼筒は細い長鐘形で基部はほとんど膨らまず、萼片は披針形でほぼ全縁といった特徴がある。今回確認したもののうち、半数に当る16個体 (No. 1~5, 14, 15, 27, 33, 35, 50, 56, 57, 59, 60, 63) はこれらの特徴を全て合わせ持つ典型的なものであったが、残りの No. 11, 20~22, 25, 28, 34, 40, 48, 54, 55, 58, 62, 64, 79, 143 の計16個体についてはこれらの形質のいずれかにわずかにオオシマザクラあるいはサトザクラ的な特徴が見られた。これらはオオシマザクラあるいはサトザクラが関与した交雑品である可能性もあるが、ほとんどの形質が種としてのヤマザクラの変異の範疇に含まれるものであったため、今回はこれらについてもヤマザクラとして取り扱うこととした。より正確な同定のためには、分子生物学的な手法を用いた今後の詳細な調査が望まれる。なお、大学環境整備課によれば、No.79の個体は、大学構内で得られた実生に由来するものとのことであり、ヤマザクラと他分類群との交雑によりできたものである可能性もある。

ヤマザクラ ‘ベニナンデン’ *P. jamasakura* Sieb. ex Koidz. ‘Beninanden’

京都の佐野藤右衛門氏が栽培していた品種で (川崎ほか1993)、植栽されることが稀なものである。若い葉ははじめは紅紫色を帯びた褐色で花時にやや展開し、成葉は裏面が白色を帯びる、花弁はサクラとしては濃い紅紫色で長楕円状倒卵形、7~11枚であるなどの特徴がある。本品種

とよく似たものにサトザクラ ‘ヤエムラサキザクラ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Purpurea-plena’ があるため、今回の調査にあたっては多摩森林科学園に植栽されているベニナンデンおよび国立遺伝学研究所に栽培されているヤエムラサキザクラの個体の枝をサンプルとして比較した。その結果、ヤエムラサキザクラの萼片の縁は鋸歯がないかあっても少数で目立たないのに対し、ベニナンデンの萼片は縁に明らかな鋸歯がある点で違いが見られた。本調査地のものもベニナンデンと同様の特徴をもつ (図2) ことから本品種と同定した。今回の調査では1個体 (No. 119) を確認した。本調査地の個体は開学直後に佐野園から導入されたものと思われる、導入時に作成されたリスト中に「江南殿」とあるものが本品種である可能性が高い。

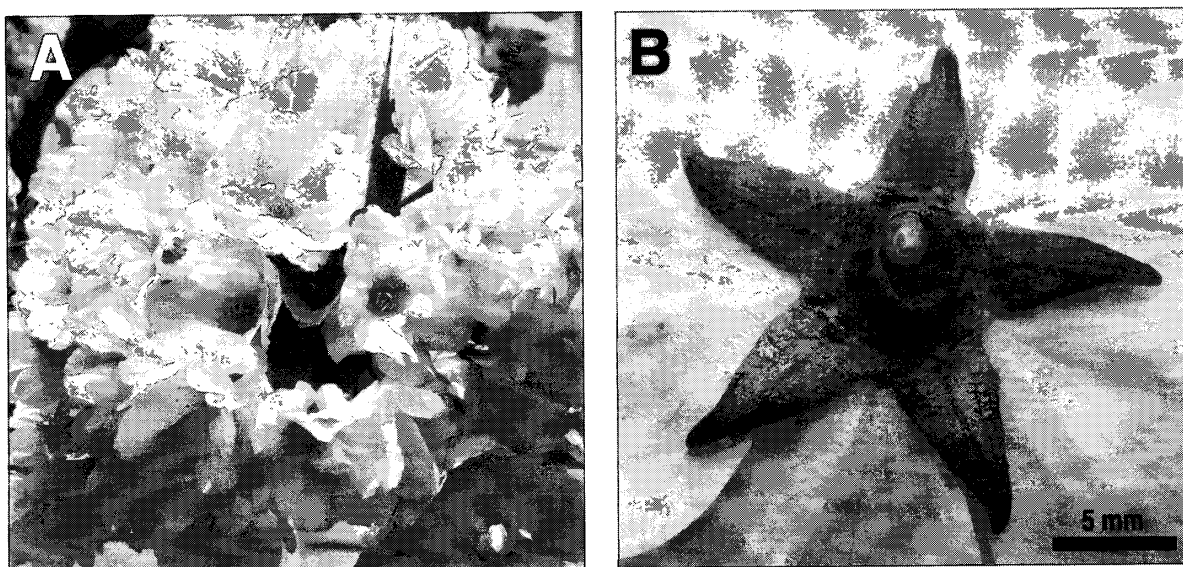


図2. 跡見学園女子大学構内に植栽されているヤマザクラ ‘ベニナンデン’ *Prunus jamasakura* ‘Beninanden’ (個体番号119) の開花状態 (A) および萼片 (B).

エドヒガン (野生型) *P. pendula* Maxim. f. *ascendens* (Makino) Ohwi

葉は側脈が多く、縁の鋸歯は低く細かく、裏面の特に脈上には斜上毛が多い、花の萼筒は下部が球状に膨らむ壺形であるといった特徴がある。今回確認した8個体中の7個体 (No. 8, 10, 12, 16, 101, 124, 129) はこれらの特徴をあわせもつ典型的なものであったが、No. 18の個体については葉縁の鋸歯が典型的なものに比してわずかながら高くなる傾向が見受けられた。これはオオシマザクラやサトザクラなどの他種が関与した交雑品である可能性もあるが、ほとんどの形態的特徴が種としてのエドヒガンの変異の範疇に含まれるものであったため、今回はエドヒガンとして取り扱った。この個体についても分子生物学的な手法を用いた今後の詳細な調査が望まれる。なお、大学環境整備課によれば、No.124の個体は、大学構内で得られた実生に由来するものとのことであったが、花や葉の形態に他分類群の特徴は認められず、交雑品である可能性はないと考えられる。

オオシマザクラ (野生型) *P. speciosa* (Koidz.) Nakai

葉縁の鋸歯は先端が長く糸状に伸長し、ヤマザクラに比してやや開出する特徴がある。同様の特徴は本種がその成立に深く関与したと考えられるサトザクラの大半の品種にも共通するが、正常な花卉は5枚、ほぼ白色で小型であり、ヤマザクラなど他種の影響が見られないものを今回は野生型のオオシマザクラとして取り扱った。今回の調査では5個体 (No. 52, 107, 149, 150, 157) の存在を確認した。このうち、No.157の個体は花に正常な花卉の他に旗弁が数枚ある「ウスガサネオオシマ」的なものであったが、このような形は野生集団中にもかなりの頻度で見られることから今回は単にオオシマザクラとして取り扱った。No. 52の個体については典型品と比較して葉裏の光沢がやや弱い傾向があったが、ほとんどの形質が種としてのオオシマザクラの変異の範疇に含まれるものであったため、今回はオオシマザクラとして取り扱った。また、No.107の個体は1花序当たりの花数が目立って多い興味深いものであり、今後の詳細な調査が望まれる。No.149の個体はNo.68のサトザクラ‘ウコン’と樹幹の基部で合着しており、台木として使用されたものが生長したものと推定される。なお、大学環境整備課によれば、No.157の個体は、大学構内で得られた実生に由来するものとのことであったが、花や葉の形態に他分類群の特徴は認められず、交雑品である可能性はないと考えられる。

サトザクラ ‘アラシヤマ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Arasiyama’

若い葉は紅紫色で開花時に展開し、成葉の縁には先は芒状となる単鋸歯がある、鱗片や苞は紅紫色で細長い、萼筒は長鐘形で紅紫色、萼片は長楕円形で縁に明瞭な鋸歯がある、花卉は5枚、円形ではほぼ平坦、微淡紅色で外面はやや色が濃いなどの特徴から、本品種と同定した。今回の調査では4個体 (No.36, 83, 130, 164) を確認した。このうち、No.36 および130の2個体は開学直後に佐野園から導入されたものと思われるが、導入時に作成されたリスト中に上述の品種名は挙がっておらず、「里桜」として一括されたものの中に含まれていた可能性が高い。No.83 および164の2個体は他の2本と比較して木がやや小さく、大学環境整備課によれば大学構内で得られた実生に由来するものとのことであったが、上述の特徴はほぼ同様でありほとんど差異が認められなかったため今回は本品種として報告しておく。

サトザクラ ‘コマツナギ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Komatsunagi’

若い葉は褐色で開花時にやや展開し、花卉は5枚、白色で円形、長さ約2.5cmと大型で全体にしわ状のうねりがあるなどの特徴から、本品種と同定した。今回の調査では1個体 (No.127) を確認した。サトザクラの‘タイハク’ ‘Taihaku’ および‘クルマドメ’ ‘Kurumadome’ は本品種に酷似しており、同一品種である可能性が示唆されている (川崎ほか1993, 勝木2001)。また、最近の分子生物学的研究からも本品種と‘タイハク’は同一品種である可能性が非常に高

いと推測されている（服部ほか2002）。跡見学園女子大学に植栽されているものは開学直後に佐野園から導入されたものと思われるが、導入時に作成されたリスト中に「駒繫」の名が挙がっているため、今回はこの名で報告することとした。

サトザクラ ‘クシマザクラ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Kusimana’

長崎県大村市の大村神社に植栽されていたものをもとに、外山・木村（1947）が報告記載した品種で、一般的に広く植栽されるサトザクラの‘フゲンゾウ’ ‘albo-rosea’ に酷似するが、二段咲きになる花が混ざることが識別点とされている。跡見学園女子大学構内には‘フゲンゾウ’ 様の個体が2個体あったが、そのうちの1個体（No.29）は葉化した2個の雌蕊の間に小さな花卉が出る花が混在することが観察された。外山・木村（1947）や大井・太田（1973）では‘クシマザクラ’ の解説中で約半数の花が二段咲きになると記述しているが、2001年から2003年に観察した限りでは本調査地の個体では二段咲きの花の割合は著しく少なかった。しかし、外山（1974）は同一個体でも二段咲きの花の割合は年により変化することを述べており、今回のところはこの個体をクシマザクラとして報告することとした。

サトザクラ ‘コウダイジ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Kodaiji’

京都の高台寺にある原木から佐野藤右衛門氏により増殖された品種で（川崎ほか1993）、少なくとも関東地方では植栽されることが稀である。成葉は大きく、縁にサトザクラの‘マザクラ’ ‘Multiplex’ に似た粗く鋭い重鋸歯が目立ち、萼片は卵形で縁に著しい鋸歯がある（図3）、花卉は微淡紅色で厚くしわが目立ち5～8枚であるなどの特徴から本品種と同定した。今回の調

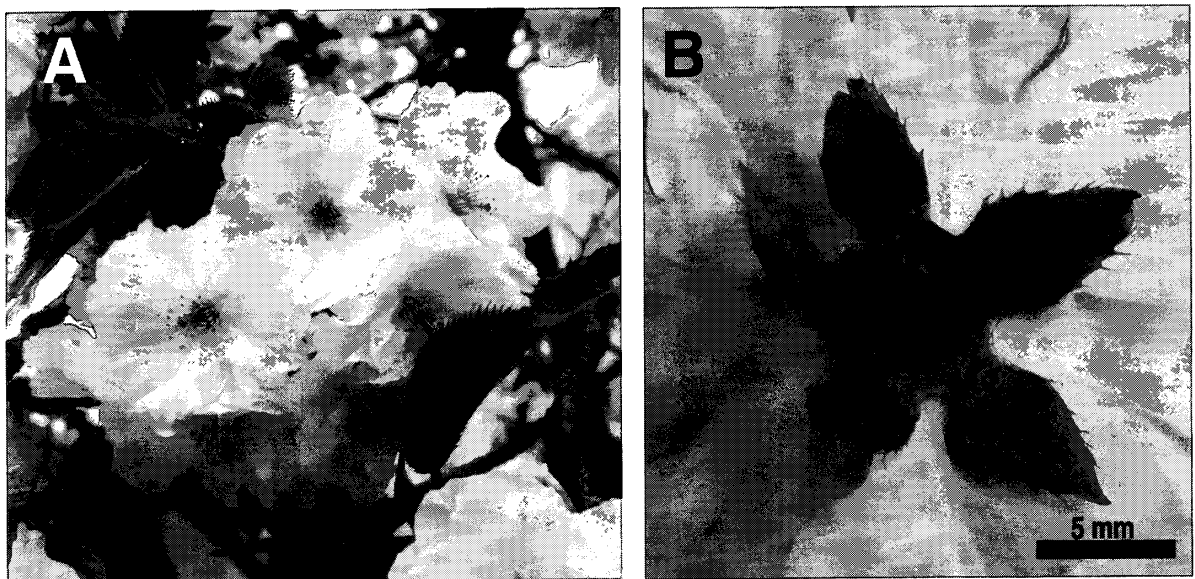


図3. 跡見学園女子大学構内に植栽されているサトザクラ ‘コウダイジ’ *Prunus lannesiana* ‘Kodaiji’（個体番号86）の開花状態（A）および萼片（B）。

査では3個体(No.86~88)を確認した。

サトザクラ ‘エド’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Nobilis’

若い葉は黄緑色を帯びた褐色で開花時にはやや展開し、成葉はサトザクラとしては小型で長さの割に幅が広く裏面はやや白色を帯びる、鱗片や苞はやや褐色を帯びた黄緑色で小型である、萼筒はやや短い鐘形、萼片は狭三角形で平坦である、花弁は20枚前後、淡紅色で外側のものや縁はやや色が濃いなどの特徴から、本品種と同定した。今回の調査では5個体(No.31, 66, 106, 117, 145)を確認した。サトザクラのうち ‘アズマニシキ’ ‘Azuma-nishiki’, ‘イトククリ’ ‘Fasciculata’, ‘テマリ’ ‘Temari’ および ‘ヤエベニトラノオ’ ‘Yae-benitorano-o’ は本品種に酷似しており、同一品種である可能性が示唆されている(川崎ほか1993, 勝木2001)。今回の調査にあたってはこれらの名で多摩森林科学園で栽培されていた個体の花枝をサンプルとして採取し比較を行ったが、跡見学園女子大学のものも含めてこれらの個体間に明瞭な形質の差異は認められなかった。今回は最も一般的に栽培されている ‘エド’ の名で報告しておくこととした。なお、跡見学園女子大学に植栽されているものは開学直後に佐野園から導入されたものと思われるが、導入時に作成されたリスト中に上述の品種名は挙がっておらず、「里桜」として一括されたものの中に含まれていたものである可能性が高い。

サトザクラ ‘シラユキ’ *P. lannesiana* (Carr.) Wilson ‘Sirayuki’

若い葉は褐色で開花時にはあまり展開せず、成葉は主脈上に長毛がある、花柄には開出する軟毛が密生する、萼筒は太く短い筒状鐘形、花弁は5枚、白色で長さ約2cm、しわ状のうねりは少ないなどの特徴から、本品種と同定した。今回の調査では1個体(No.67)を確認した。サトザクラの ‘カリギヌ’ ‘Kariginu’ および ‘オキナザクラ’ ‘Okinazakura’ は本品種に酷似しており、同一品種である可能性が示唆されている(川崎ほか1993, 勝木2001)。今回の調査にあたってはこれらの名で多摩森林科学園で栽培されていた個体の花枝をサンプルとして採取し比較を行ったが、跡見学園女子大学のものも含めてこれらの個体間に明瞭な形質の差異は認められなかった。今回は最も一般的に栽培されている ‘シラユキ’ の名で報告しておくこととした。なお、跡見学園女子大学に植栽されているものは開学直後に佐野園から導入されたものと思われるが、導入時に作成されたリスト中に上述の品種名は挙がっておらず、「里桜」として一括されたものの中に含まれていたものである可能性が高い。

サトザクラの一品種(個体No.161) *P. lannesiana* (Carr.) Wilson cv.

この個体は、若い葉はやや褐色を帯びた黄緑色で開花時に展開し、成葉は葉柄が長く、縁に先端が芒状に伸びる荒い鋸歯が目立つ、総花柄は長く伸長するがやや太いため下垂しない、鱗片や

苞はわずかに褐色を帯びた黄緑色で花時に開出する、萼筒はやや太く短い筒状鐘形、花弁は5枚で白色からやや微淡紅色で卵円形から円形、しわ状のうねりがあるなどの特徴を示し(図4)、大井・太田(1973)に掲載されたサトザクラの‘オオシバヤマ’ ‘Ohsibayama’の図に酷似したものであった。この図は石川県林業試験場に植栽されていた個体を描いたものであり、比較用のサンプルを得るために同試験場に問い合わせたが、現在ではこの品種名で栽培されているものはないとのことであった。‘オオシバヤマ’はKoidzumi(1913)が最初に記載した品種であるが、その記述は極めて簡素であるためにその特徴がよく判らず、大井・太田(1973)の図がこれと同一のものを指しているのか自体が不明である。また、この名前の品種が現存しているかどうか不明であり、その正体はよく判らないのが現状である。このため、今回は跡見学園女子大学の個体は‘オオシバヤマ’と断定せず、サトザクラの一品種として扱った。今後、この個体を同定するには、過去に得られた‘オオシバヤマ’の標本の探索を行い、萼片の形質などを詳細に比較調査する必要がある。

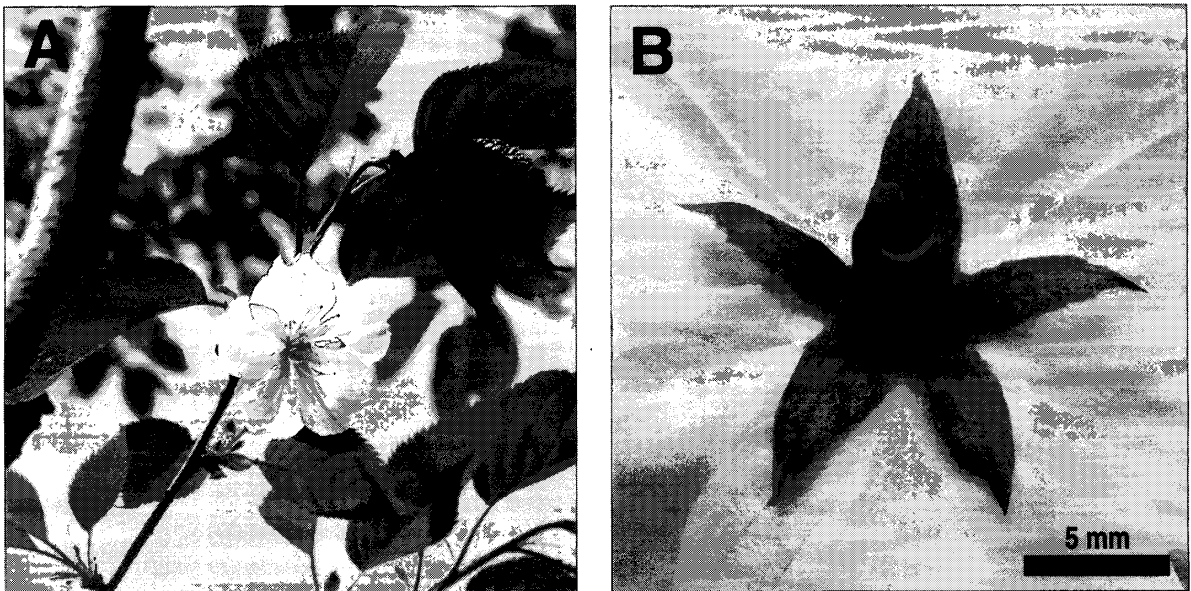


図4. 跡見学園女子大学構内に植栽されているサトザクラの一品種 *Prunus lannesiana* cv. (個体番号161)の開花状態(A)および萼片(B).

交雑個体

確実に複数の分類群や園芸品種の交雑に由来し、品種名が与えられていないと考えられるものを、今回は一括して交雑個体として取り扱った。本調査地ではこのカテゴリーに含まれるもののがかなり多く、計19個体が見い出された。このうちの1個体(No.85)は、特に花はエドヒガンに酷似しており識別が困難なものであったが、葉縁の鋸歯は典型的なエドヒガンよりもやや大きい上に開出する傾向が認められたため、エドヒガンとオオシマザクラが関与した交雑品であると推測された。ただし、この個体はエドヒガンの特徴が非常に強くみられ、エドヒガンとオオシマ

跡見学園女子大学におけるサクラの同定調査

ザクラの単純な雑種第一代とは考え難い。この個体は大学環境整備課によれば大学構内で得られた実生に由来するものとのことであり、オオシマザクラとエドヒガンの中間的な形質をもつメイヨシノ *P. yedoensis* Matsum. が少なくとも片親として関与した可能性が高い。これ以外の18個体 (No.9, 23, 26, 30, 37, 51, 53, 61, 69~71, 76, 135, 141, 142, 158~160) についてはヤマザクラまたはオオシマザクラの形質が強く表れたものであったが、その形質状態は様々であった (図5)。大学環境整備課によれば、これらのうちの3個体 (個体No.158~160) は大学構内で得られた実生に由来するものであるとのことで、その他15個体は開学直後に佐野園から導入され

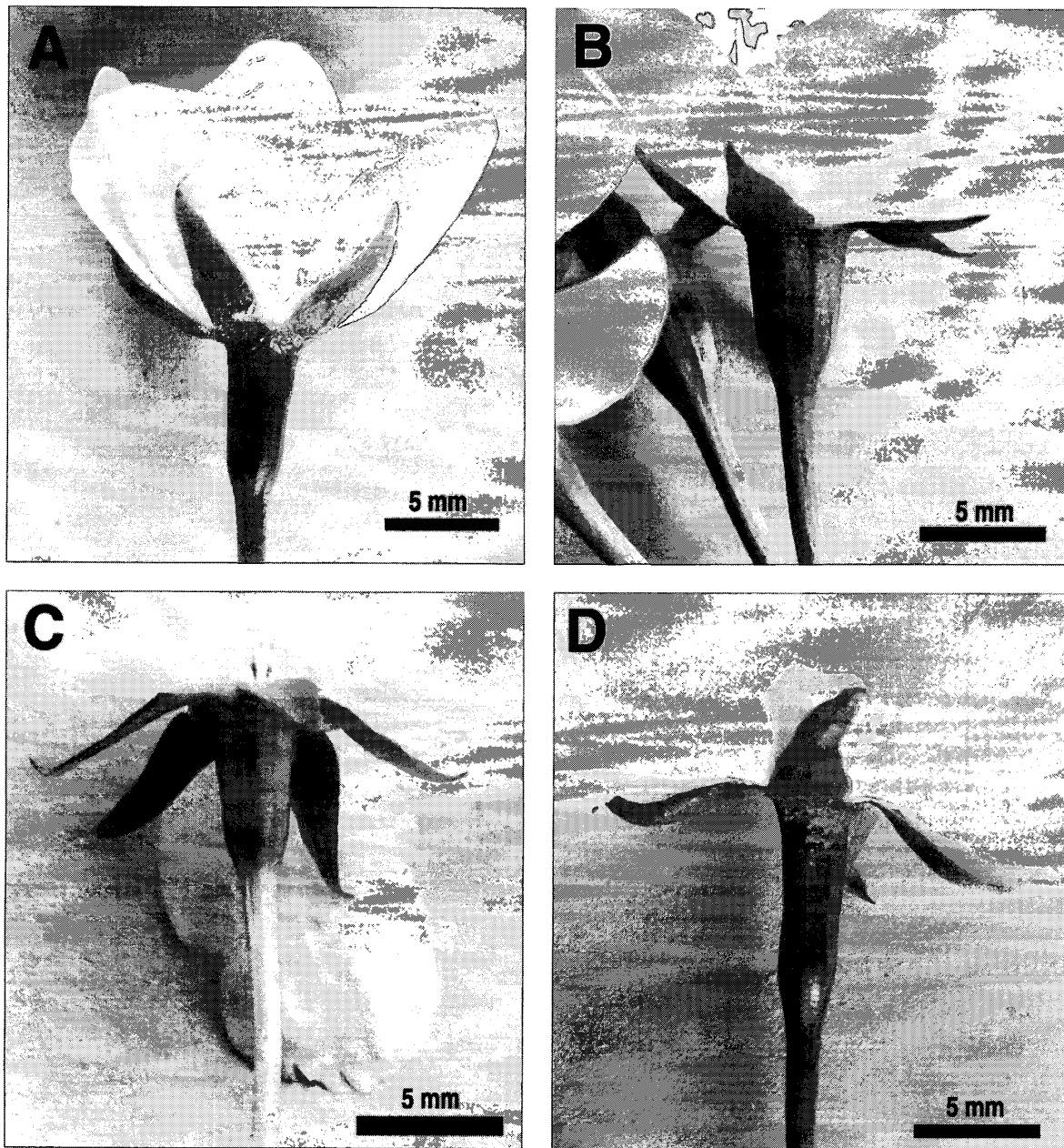


図5. 跡見学園女子大学構内に植栽されているヤマザクラ *Prunus jamasakura* とオオシマザクラ *P. speciosa* またはサトザクラ *P. lannesiana* の交雑に起源すると考えられる個体の萼片および萼筒。A.個体番号9; B.個体番号37; C.個体番号51; D.個体番号53.

たものであると考えられる。いずれにせよ、これらが生じた周囲にはヤマザクラやオオシマザクラ、サトザクラなどが混植されていたことが想定され、形態の調査だけからそれぞれの個体がどのような種類の組合せに由来するのかを推定することは非常に困難であると思われる。なお、これらの中には、特に品種名を与えて区別する必要があると思われるほど著しい形態的特徴を示す個体は含まれていなかった。

謝辞

園芸品種の同定を行うに当たり、適切な助言を頂いた独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園の勝木俊雄氏に深く御礼申し上げます。また、品種同定用のサンプル提供に便宜をお計り頂いた独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園の三輪雄四郎園長、国立遺伝学研究所の堀田凱樹所長ならびに館野義男教授、東京大学大学院理学系研究科附属植物園の邑田仁園長、東京都立大学大学院理学研究科元教授布山喜章氏に深く御礼を申し上げます。

さらに、現地（本学内その他）調査や情報収集に協力、便宜を計ってくださった本学学長山崎一穎氏、副学長嶋田英誠氏、事務局長倉科嘉夫氏、環境整備課の方々、また資料整理等にご助力頂いた松平暁子氏、松本聡子氏、標本・地図・写真などの作製にあられた本学卒業生の井澤栄子氏、中山（旧姓原）さとみ氏に篤く感謝申し上げます。

引用文献

- 服部紗代子・加藤珠理・横山敏孝・向井譲. 2002. サクラ園芸品種における自家不和合性遺伝子 (*S-Rnase*) の多型分析. 櫻の科学 9: 29-34.
- 伊藤嘉夫. 1981. 跡見学園開学縁起(二) - 校庭の桜樹 -. 跡見学園女子大学学报 3 : 2.
- 勝木俊雄. 2001. フィールドベスト図鑑10. 日本の桜. 256pp. 学習研究社, 東京.
- 川崎哲也・奥田實・木原浩. 1993. 山溪セレクション 日本の桜. 383pp. 山と溪谷社, 東京.
- Koidzumi, G. 1913. *Conspectus Rosacearum Japonicarum*. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 34-art.2 : 254-286.
- Miyoshi, M. 1906. *Die Japanischen Bergkirschen ihre Wildformen und Kulturrassen*. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 34 : 1-174.
- 大井次三郎・太田洋愛. 1973. 日本桜集. 325pp. 平凡社, 東京.
- 岡村比都美. 2002. 跡見学園女子大学の桜. 櫻の科学 9: 66-70.
- サクラの品種に関する調査研究報告書編集委員会 (編). 1982. 日本のサクラの種・品種マニュアル. 448pp. 財団法人日本花の会, 東京.
- 外山三郎・木村陽二郎. 1947. クシマザクラ. 植物研究雑誌 21 : 59-61.
- . 1974. 九州・大村公園のサトザクラ. 本田正次・林弥栄 (編), 日本のサクラ. pp. 228-231. 誠文堂新光社, 東京.
- Yamazaki H. I., F. Sasaki and T. Yoshida. 1993. Fine structure of the petal in green cherry (*Prunus lannesina* cv. *Gioiko*). Journal of Electron Microscopy 42: 274.